

○県内の大量出血時の輸血療法の実施状況を調査し、改訂された「血液製剤の使用指針」の浸透状況を把握する。
 ○昨年度FFPの使用状況について解析した症例のうち、大量輸血事例の実施状況や予後を再調査し、大量輸血プロトコールのエビデンスの構築につなげる。

H30年度までの実施状況及び課題

(国)「血液製剤の使用指針」の改訂(平成31年3月)

○ 大量輸血プロトコールを推奨する旨の記載追加
 ⇒各医療機関での指針の浸透状況が不明
 推奨レベルは1C(強く推奨, 効果の推定値に対する確信は限定的である)であり、エビデンスの蓄積が必要

(県)FFPの使用状況に関する多施設共同観察研究(平成29, 30年度実施)

○ FFP輸血28日後の予後について、周術期に凝固異常が起こる前に「予防的に」FFP輸血を実施することが功を奏している可能性を示唆
 ⇒今後使用方法による救命率の違いの検討も必要
 ○ 輸血前又は輸血後に凝固能等の検査を行っていない症例が多い。漫然とFFP輸血が繰り返されるおそれを示唆
 ⇒注意喚起が必要

R元年度研究成果

○大量輸血の実施状況について、各医療機関にアンケート調査を実施⇒大量輸血プロトコール導入
 医療機関は県内ではわずかだが、指針の周知と共に検討する施設が増加することが予測される。
 ○FFP使用症例のうち、大量輸血に該当する症例を再調査を実施⇒生存例では死亡例に比べ、血小板の比率が低い傾向があった。
 ○FFPの使用量、凝固検査実施状況、予後等について前向き研究を実施⇒FFP投与患者のうちFFP7単位以上投与、FFP投与後のINR/ARTT非改善例は予後不良となる傾向がみられた。

日本輸血・細胞治療学会で発表

エビデンスに基づく安全で有効な輸血医療の実践

アンケートにより判明した課題

○ 県内では、
 ・ 365日24時間体制の凝固検査
 ・ 輸血の有効性の評価
 ・ 製剤の取扱い
 を含めた輸血が適正に実施されていない状況がある。
 ⇒ 臨床検査技師及び看護師の役割が重要。
 同職種による輸血に関するワーキンググループの立上げが必要

	目標	平成30年度実施	R元年度実施
検査技師 小委員会	・凝固検査の体制整備 ・検査データの標準化	・要綱改正 ・小委員会設置 ・先進事例の共有 ・総合討論 ・活動方針検討	・医療機関アンケート実施 ・活動テーマ(研修内容)の検討 ・研修会の開催(内部精度管理について)
看護師 小委員会	・製剤の取扱 ・副反応発生時の対応等 ブラッシュアップ	・要綱改正 ・構成メンバー検討 ・小委員会設置に向けた関係者調整	・小委員会設置 ・課題の共有 ・活動方針検討 ・研修会の計画

検査室と輸血現場のコミュニケーションの向上